



TITLE:

故吉村達次氏の学問をふりかえって

AUTHOR(S):

林, 直道

CITATION:

林, 直道. 故吉村達次氏の学問をふりかえって. 経済論叢 1966, 97(2): 237-241

ISSUE DATE:

1966-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/133114>

RIGHT:

經濟論叢

第九十七卷 第二號

哀 辭

故吉村達次教授遺影および原稿

国債発行と金融政策	中 谷 実	1
アージリスの組織理論 (1)	田 杉 競	16
貸借対照表という用語の創出過程	高 寺 貞 男	30
独占価格と生産価格	松 石 勝 彦	51

記 事

古村教授逝く

追悼文 (池上 惇 林 直道 松井 清)

追憶談 (坂寄俊雄 稲垣 武 原田篤己)

故吉村達次教授略歴・著作目録

昭和四十一年二月

京都大學經濟學會

故 吉村達次氏の学問をふりかえって

林 直 道

私は長いあいだ経済学の研究を通じて吉村さんから親密な交際を頂きその学問的影響を最も深くうけた1人であります。過ぎし日々、私の心に刻みこまれたものを思いおこしつつ、吉村さんの学問研究の跡をふりかえってみたいと思います。

吉村さんがその研究の生活のなかで、ひときわ充実しておられたときが3回あったとおもいます。第1回目は、朝鮮戦争の時期です。1953年ごろ、吉村さんは、特需＝軍事経済の圧力のもとに崩壊の危機にあった地方民族産業をつぶさに調査研究され、平和経済への転換こそ、地方民族産業の生きる道であることをつよく訴えられました。これにひきついて、戦後経済学界の最も大きい出来事の1つであるソ連科学院経済研究所『経済学教科書』（Политическая экономия, учебник, 1954, 邦訳, 1955年）の研究と普及の活動が訪れます。吉村さんは、岩波書店『経済学小辞典・増訂版』（大阪市大経済研究所編）の中心項目である「最大限利潤」の項を執筆するなど、理論研究の面で大きい役割をえんじただけでなく、また経済学の普及活動にも熱心に参加され、その深い理論的素養を、経済学を学ぼうとする学生・勤労者のために惜しみなく役立てられました。話が原始共同体のくだりにおよぶと、太平洋戦争中、南方で見聞された原住民社会の話がされ、「原始共同体の基本的経済法則のとおりでした」と例の調子で顔中を口にして大笑をされたのをおもいだします。

吉村さんは、戦後わが国の一時期の科学運動の合い言葉であった《国民のための科学》

を身をもって実践されたのです。

数年の沈潜ののち、1957年ごろから、研究上の第2の波が訪れ、恐慌論にかんするすぐれた論文が矢つぎばやに発表されました。これは、のちに『恐慌論の研究』（三一書房刊、1961年）として一本にまとめられたものです。私は本書には3つの成果が示されていると考えます。

第1は、恐慌を資本主義の基本的矛盾（生産の社会的性格と取得の私的資本主義的形態との矛盾）から展開しようという観点を確立されたことです。当時日本のマルクス経済学界には、50年代前半の支配的潮流にたいする一種の思想的反動として修正主義的傾向が色濃くただよい、理論を時流にあわせて流線型化する風潮が強かったなかで、吉村さんは頑として原則を固守されました。この点で吉村さんは、戦前の山田盛太郎教授の「再生産過程表式分析序論」以来のわが国恐慌論研究の正統的継承者の一人であったわけです。

第2の成果は、固定資本の再生産に関する研究であります。1957—58年恐慌の前後からわが国ではこの問題の研究がいっせいはじまり、古川哲氏が「静かな革命」と呼んだほどの大転換を恐慌理論の分野にひきおこしました。この固定資本研究が始まった理由については吉村さん自身が著書の112ページで「的確な指摘」（南克己氏の評言）をされたとおり、第2次大戦後の資本主義経済の新現象に対応してマルクス経済学を深化発展させる課題の一環として、恐慌論を抽象的な再生産＝実現理論の段階から景気の循環変動の理論にまで具体化しようという動機がつよく働いていました。吉村さんのこの問題に関する研究は、他の人々よりも少しおくれて発表されたとはいえ、さわめて高い原則的観点に立って、同種の研究を批判的に総括・発展させ、それらの水準をぬき出した成果をあげられたということが出来ます。

第3の成果は、再生産の法則と利潤率均等化法則との矛盾・二律背反の指摘、およびこれを基にした循環的変動の理論化の試みであります。吉村さんは、かのポルトゥガール以来のいわゆる「転形問題」の研究において人々が躓きをよぎなくされてきたところに、かえって客観的な矛盾の存在を確認し、これを「転形問題の逆説」と名付けられました。そしてこの矛盾しあう2つの均衡中心間の資本の移動・通壓を軸として、循環的変動の軌道を確定するという困難な課題に立向われたのです。吉村さんはこの研究にひじょうな愛着をしめされ、『資本論』のなかの「一物体が絶えず他の物体に落下しながら、また同時に絶えずそれからとびさるということは、一つの矛盾である。楕円は、この矛盾が実現されるとともに解決される諸運動形態の一つである」（第1巻、ドイツ語本、109ページ）という一節を、これだこれだといって何度も語られたことでした。この研究は吉村さんの最もユニークな成果として、多くの人々によって高く評価されております。

このように『恐慌論の研究』は、その理論的達成において高度であります。さらに私は本書がひじょうな創造的労苦の産物であるということを指摘したいとおもいます。吉村さんの書物は、どの1ページといえども、いわゆる「流して」書かれた部分がなく、全ページ骨身を削るような労苦の産物であることが読者に伝わってくる、そんな書物なのです。

これにつづく時期、とくに1961年ごろから最近にいたるまでが吉村さんの第3の高揚期でした。ここで集中的にとりくんでおられたのは、経済学の方法論です。吉村さんは、恐慌というものを、労働者階級が資本主義の基本的矛盾を認識し、構造揚棄の必然性を自覚するにいたる契機としてとらえておられました。これは吉村さんの恐慌論研究の高い観点を示すものです。恐慌・循環論は「崩壊論」と結びつかねばならぬ、これが吉村さんの口ぐせでした。そこで吉村さんの研究は、この、循環の法則と崩壊・移行の法則という二種の法則を統一的に把握し、それによって「近代社会の経済的運動法則」を生成・発展・没落の法則としてとらえ、「現存するものの肯定的理解のうちに同時にその否定、その必然的没落の理解をふくめる」というテーマに向うこととなりました。こうなってくると吉村さんの考えは、社会発展や資本主義の崩壊などの叙述を「不純なもの」として『資本論』のワケ外へ排除し、「永久に同じ運動をくりかえす」運動だけで経済学の「原理論」をくみだてようとする宇野弘藏教授のいわゆる三分化説（原理論、段階論、現状分析）と正面から衝突せざるをえません。こうして吉村さんの宇野理論批判が始まったのです。当時、見田石介さんはじめ数人のものが集まり、そうした問題にかんする研究会を1年間つづけました。このころは吉村さんの生涯のなかでも、いちばん余裕のある爽快な時期ではなかったかとおもいます。研究会がおわると吉村さんはとても上機嫌で例の《哲学の小径》や法然院、南禅寺の湯どうぶ、加茂川の床、等々あちこちを案内されたことをなつかしく思い出します。1962年、『経済』という雑誌が創刊されました。吉村さんはこの雑誌に期待し、大いに力を入れられたのですが、その創刊号には横山正彦さんの論文とともに、吉村さんの宇野氏『経済学方法論』にたいする論評がのっています。形式は「書評」だとはいえ、これはじつに内容の豊富な、りっぱな労作ということが出来ます。そこでは宇野理論が理論と実践とを切りはなし、経済学から階級闘争の要因を追いだすことによってマルクス経済学のブルジョア化をくわだてるものだという論旨があざやかに展開されています。

1964年6月、吉村さんは北京において中国経済学者を前に「戦後日本経済学の動向」と題した講演をされました。前夜、ホテルで徹夜してかかれたその原稿（一部メモのまま）をみますと、戦後日本経済の発展、安保以後さかんとなったアメリカ・日本独占資本の経済学者にたいするさまざまな工作、修正主義的潮流の発生の根源、および若干の

修正理論の内容と特徴、などについて、吉村さんがいかに鋭い時代感覚で問題をとらえておられたかがよくわかります。

生前、吉村さんは、『経済学方法論—宇野理論批判—』という本を出そうと、はり切っておられました。没後、夫人、池上、稲垣さんたちと書庫をさがしたところ、それとおぼしい未完の草稿が数点出てきました。また「移行法則と主体の問題」を軸として資本主義・帝国主義・全般的危機を統一的に把握しようという野心的な理論体系の構想を示したメモも出てきました。また、亡くなられる寸前、吉村さんは経済原論の著作計画をねっているのだが、そのうち一度相談しようといっておられました。いよいよこれから永年の蘊蓄がつつぎつつぎ著作となって結実しようとするまさにそのときに、吉村さんが斃られたことは、吉村さんのためにも、また日本の経済学界のためにも惜みても余りあることと申さねばなりません。さいわい、上記『経済学方法論』については遺稿を整理のうえ、近く関係者の手で出版される計画のあることを報告しておきます。

さいごに吉村さんの学風といったものについて一言したいと思います。第1に、吉村さんの書かれたものには、およそ、はったりやごまかしがなく、謙虚で誠実な人柄がそのままにじみでています。吉村さんは、原則が問題になっている場合には、きわめて頑強で、一部の人間からは「頑固派」と煙たがられました。しかし自分個人のこととなると、吉村さんはまったく欲がなく、世評に超然としていたところがありました。たとえば吉村さんの著書は恐慌論ブームのすぎたあとで出たこともあって、なかなか書評が現われなかったのですが、私はそれについてついぞグチらしいものを聞いたことがありません。河上肇博士の言葉に、「凡そ学に志す者は知られざるを恨むなかれ、知らざるを恐れよ」というのがありますが、まことに吉村さんはそれが身についた人でした。しかし吉村さんのいぶし銀のような研究成果は、今後時がたつにつれてますます値打ちが出てき、日本の経済学界に影響を与えてゆくにちがいないと信じます。

第2に、吉村さんは、つねに未来を展望し、未来を信じていた人でした。勉力的には年令以上に衰えていたにもかかわらず、まるで永遠の青年といったようなムードをただよわせておられたのも、未来を信じる学風から来たものと思います。

1966年1月21日、比叡にまだ雪が残っている寒い夕べ、吉村さんは永遠の眠りにつかれました。柩には久美子夫人のプレゼントだった『資本論』のドイツ語版(*Das Kapital*)が納められました。

ベトナム侵略戦争の拡大、日韓条約の締結などを契機として、しだいに平和が、そして言論・思想の自由がおびやかされつつあるこんにち、吉村さんを失ったことは大きな痛手です。いまは、吉村さんの遺志をうけつぎ、経済学を人民の利益のために、そしてよりよき未来のために役立たせるたたかいに、吉村さんの分までやることを誓うばかり

です。

これをもって吉村さんの霊にささげる言葉とします。
